

財団だより

多摩川

1984. 12. 第24号



マガモ (♂)

オスは全体に淡い褐色、
緑色の首、黄色いくちばし、
白い首輪が特徴。

大國魂神社拝殿 (1984年11月撮影)

■ 多摩川博物誌 ■

⑧ 大國魂神社

京王線府中駅を降りると、天然記念物“ケヤキ並木”がすぐ目にはいる。その中を南に約300メートル——つきあたったところか武蔵総社大國魂神社だ。いまから約1800年前、ある晩、一村人が寝ていると、突然目の前に大國魂大神が現れた。

「私は衣食住の道や医療法の術をおしえ、福神とか縁結びの神といわれている。私をまつらぬと、この土地で平和な生活ができないぞ」という忠告。そこで、この村人は土地の人たちと相談し、神社を建ててまつることにした。

大國魂神社は、素戔嗚尊の子ともて、出雲大社にまつられてある大國主命のことだ。武蔵国造となり、子孫は代々その祭務にあたっていた。約1300年前の大化の改新で、国府の斎場となり、武蔵の国の神社の総元締めをすることになった。そして、武蔵総社大國魂神社と改名されたといわれている。

いま市のメインストリートになっている“ケヤキ並木”も、昔は境内だったという。物茂卿の「畷中紀行」に「見事な木が茂り、大変もの静かなところだ」とある。

約900年前の永承6年、陸奥の安部頼時父子の反乱征伐に向った源頼義、義家父子が、ここで戦勝を祈願した。安部父子を征伐し、再び同神社にたち寄った際、そのお礼にケヤキ千本を奉納、それがいまのような大ケヤキとなったという。

また、徳川家康がこの一帯の平野に目をつけ、牧場にして馬を育てた。この馬が関ヶ原、大坂の両役に軍馬として大活躍、その功としてケヤキを植えた。これが「馬場大門ケヤキ並木」と名付けられ、大正13年に天然記念物に指定されたものだ。名実ともに市の名物になっている。

しかし、このケヤキ並木も、住宅ブームや自動車ラッシュによる排気ガス、パイ煙ですっかり衰え、さらに地下水の水位が下がったため、かれはじめた。枝を切ったり補植したり——同神社はテンテコ舞いだ。(中略)

毎年5月5日は、大國魂大神を祝う祭が行われる。馬にまたがった宮司が、ケヤキ並木におかれた的をめかけて矢を射る流鏑(やぶ)など古式豊かな行事でお祭には約10万人の見物客が詰めかける。

「新編武蔵風土記」朝日新聞社編1971



●年末の大国魂神社界わい

府中市立郷土館 尾崎 治子

晴れ着に包まれたおぼつかない足取の子供たちが千歳飴の袋を引きずる様にして行きかう姿と、宵闇の中、色あざやかな熊手を賑やかに商うお酉様の季節が過ぎると大国魂神社の境内も一気に年の瀬の近づく気配がする。

旧甲州街道に面する大鳥居の傍で上げられる正月飾りの準備には決まりものの松は無い。その昔、大国魂の神様が帰らぬ八幡神を待ちわびて「待つはつらい」とのたもうたとか。それ以来この境内には松は根つかず、府中では正月飾りも竹ばかりで立てるようになったという。真偽の程はともかく、確かに境内には松は見当たらず、1960年代に地下水位の低下による枯死を招くまではうっそうとした杉の森がみられたという。

何とはなし気忙しい町中から境内を抜けて裏へ回ると人けの少い道がある。神社の東側、神殿に向って左側を神社の外回りの柵に沿ってたどると、だらだらとした坂になっていつの間にか道ともつかない小道となり、行止りかなと訝る頃妙光院の墓地へ抜ける。これは俗にハケと呼ばれる立川段丘から沖積低地に下りる崖線にある坂の一つで、坂の上の町場の人達は地獄坂とも暗闇坂とも呼んできた。この恐しげな名は寺へ向うイメージとともに、右には境内の杉の森、左には今はすっかり住宅に変わっているがもとは竹藪という、そのうす暗さからきたのだろうか。

古い地図によれば、道は墓地へは入らず、妙光院の寺域にぶつかると東へ折れ、今の競馬場の方

へ通じていた。またそのあたりは大国魂神社の神田である御供田の跡で、暗闇祭の翌日5月6日の御田植の神事もこの田で行われていたという。そこを過ぎると道は南へ是政の部落へ向い、さらに多摩川へ通じていた。しかし今は坂を下りきると競馬場の門が見え、名前の通りの地獄坂なのか或は変じて極楽坂なのか。

一方、大国魂神社境内を西側へ回ると釜比羅坂がある。神輿歳も兼ねる宝物殿の裏を行くと、落葉を踏み分ける格好の散歩道である。こちらも妙光院へ通じているが、坂の下り口に妙光院の金比羅堂があるところからこの名がついた。妙光院、隣接する安養寺と府中の古刹を訪ねると先は矢崎の部落になる。

おし詰って12月の30と31日には大国魂の境内に暮の市が立つ。この市は1950年代の前半頃までは25～27日に横町（現市役所前の府中街道）から旧甲州街道にかけて露店が並んだのが、車の交通量に負けて境内で開かれるようになったものである。籠市とも呼ばれたように竹で編んだ籠や箕、箒の商いが多かったという。近在から集まった人々はまず大きなしよい籠を求め、露店をひやかしながら正月用品を買っては背中の籠に入れて帰ったものだ、古くから住む人達は話してくれる。是政や矢崎からもたぶん神社の裏の坂を近道にして、正月の仕度をしに町場へ来たに違いない。

しかしそれも今は昔。車の通れる道が生活の道になり、車におされて街道の露店も消えた。わずかに境内の市に香を残すのみである。それも、ハケ下の水田が殆ど無くなっては農具も新調されず、籠市も名無しの市になっていく。一夜明けて初詣の神頼みばかりが年々盛況であるのをいささか戸惑うのは私だけだろうか。



私と多摩川



調布市染地の多摩川(1983年初夏)

多摩川水系自然保護団体協議会 森田英代

私が多摩川とつき合うようになったのは昭和43年のことだから、今年で16年になる。こんなに長く、こんなに深く多摩川と関わり合うことになるとは想像もしなかった。

はじめの2年間は調布市染地の多摩川べりに新たに移り住んだ市民として——。多摩川はわが家の庭となり、朝に夕に家族中で親しんだ。ひまさえあれば子ども達を連れ出し、季節によって、水遊び、散歩、凧上げなどを思う存分楽しむことができた。都会の喧騒を忘れて、のどかな野鳥のさえずりに耳をかたむけ、静かに咲く河原の花に季節の変化を確かめながら。

しかし、多摩川との、この蜜月も2年間で終ることになる。つまり、昭和45年に東京都が羽田—立川間40kmの多摩川ぞい自動車道路建設計画を発表した後、「多摩川の自然と住民の生活環境を守る」ために、この計画に反対する運動が川沿いの各地ではじめられたからである。

当時すでに、中流より下では水質も悪化しており、建設省の進める開放計画や都市河川整備事業によって河原はグランドや人工的な公園に変えられ、自然空間は急激に失われつつあった。遅まきながら、自然を破壊するのは道路建設だけではないことを知り、多摩川の自然を守る会の会員となって、活動の手伝いや自然保護の勉強をはじめた。

昭和47年には私の住んでいた団地で、子ども達と共に、自然を観察し、自然保護を進める「くさぶえ会」が母親たちによってつくられた。専門や



河川敷を荒らすモトクロス(三子玉川附近・1984年3月)

趣味を生かして自然保護運動に参加していた若者達の協力を得て、活動を進めながら、多摩川の自然の価値や、自然保護の必要性を極めて自然に学ぶことができた。

昭和49年には多摩川ぞいの20余の自然保護団体によって「多摩川水系自然保護団体協議会」が組織され、多摩川水系の自然を守るために情報交換や連帯活動がはじまった。私は昭和55年からその事務局を引き受けている。この協議会では、これまでに多摩川シンポジウムや多摩川を歩く会を開催しており、今後も調査や研究を含む広汎な活動が計画されている。

多摩川は代表的な都市河川として多くの人の関心を集めていて、その環境保全についても専門家や学者からさまざまな意見が出されている。どの意見も私には刮目に値し、啓発されるところが多い。しかし、私はいつも、「住民の目と感覚で多摩川を見つめ、考える」ことが私の役目であると自覚している。私にとっての多摩川は、かつて子ども達と楽しく遊んだ平和な多摩川に焦点を合わせて結ばれる、のどかな原風景からはじめられる。

残念なことに、その多摩川は今、自然が残されていたわずかな空間でもモトクロスが行われ、グランドや自然公園という名の人工公園が増え続けている。人間にとって必要な多摩川の自然を守ることは決して容易ではないが、これからも、ささやかなお手伝いを続けて行きたいと思っている。多摩川とつき合うことによって私の人生がどれほど豊かになったか、はかり知れないものがある。

甦れ！ 多摩川

●調布取水堰の魚道改修

山道省三

多摩川で獲れるアユの中に天然アユが混ざっているという噂が、漁協関係者や釣人の間から聞かれるようになって5～6年もたつだろう。昨年九月号のこの欄で、東京都の水産試験場が丸子橋下で天然アユ（放流したアユが多摩川で産卵し、その稚魚が一冬東京湾で過ごし春にソ上したもの）のソ上を確認したとお伝えしたが、調布堰から下流の水質が格段に良くなってきたことから、相当数のアユがソ上していると予想される。

東京都は、そうした事実や多摩川漁協の強い要望に答えて調布取水堰左岸側の魚道を常時アユが上流へとソ上できるよう、昭和57年から工事を始め今年の3月に改修し終えた。今までの魚道は、階段状の床にコンクリート壁が立ったままであり、上流の水位が低くなると水は下へ流れないような構造になっていた。それを、下図に示すように上流側3ヶ所のコンクリート壁をとり払い、鋼製可動式の3連ゲートを取りつけた。このゲートは上流約50m程の所に設置された水位計と連動しており水位の変化に応じて自動的に越流する水を調整する仕組みになっている。東京都水道局浄水課により1.6億円のコストがかかった。この堰ができてから、アユがどの程度ソ上するようになったか調査されていないが、狛江でアユ料理などを食べさせてくれる川線（カワセン）^{※1}のご主人によると、今年は天然アユの数がずいぶん増えたとのことで

あった。この方は、多摩川漁協に属し昔から多摩川のアユを投網で獲ってこられたそうだが、今年は約6割が天然アユだったそうである。

毎年放流されるアユは漁期の間にそのほとんどが釣られたり捕獲されてしまうが、かろうじて残ったものが中流部で産卵する。そのうちの程度が再び多摩川へ戻るのか定かではないが、投網に入った6割は少々オーバーとしても相当数が戻ってきている。

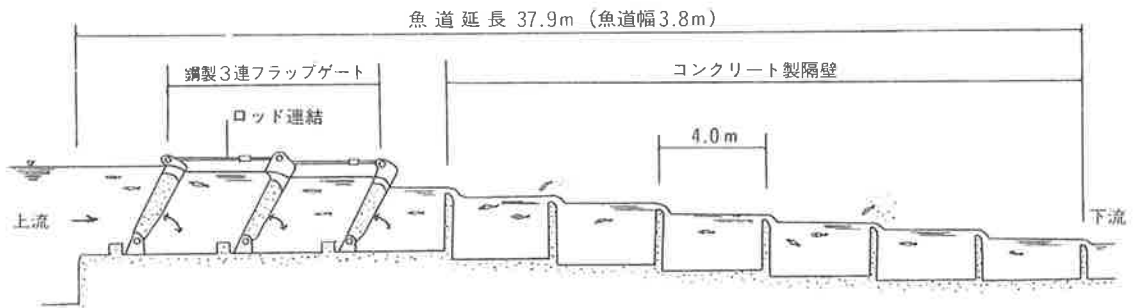
中村守純氏^{※2}によると産卵期は9～12月、中流域の下限付近まで降って砂礫底に産卵する。多摩川中流域の下部は東京都の水質調査(昭和57年度)によるとアユの生息条件にはまだ満たされていない。しかしながら、産卵し天然ソ上する事実がある以上、少なくともその場所の保全、つまり、川底の条件を産卵に適するよう配慮したらどうだろうか。多摩川にはすでに高水敷の利用を目的とした河川環境管理計画を策定したが、川底まではふれられていない。

10年前多くの人の願いは、多摩川にアユが天然ソ上する事であった。昔のように川に足を入れるとぶつかるほどまでとは言わないが、アユソ上のため、魚道を改修した以上、産卵条件の保全を含めさらにつっ込んだ対策が望まれる。

※1. 川線(カワセン) 狛江市駒井町にある小料理店
03-480-8593

※2. 原色淡水魚類検索図鑑 中村守純著 北隆館 1975

調布取水堰魚道完成図



「多摩川およびその流域の環境浄化に関する 調査・試験研究」募集

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行なってきました。既に152件の研究に対して助成金を交付し、93件の研究成果を得ることが出来ました。

昭和60年度も引き続き大都市東京圏における「多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・試験研究」をひろく募集いたします。

対象者は、多摩川およびその流域の環境問題に関する調査・研究に意欲のある方でしたら、どなたでも応募できます。

研究対象

(1) 産業活動または生活環境と多摩川およびその流域との関係にまつわる調査・試験研究

産業構造の地殻変動とそれに伴う生活環境の変化がさまざまな社会現象を伴いながら複雑な動きを起す中で、人々の余暇時間は増加し、欧米に類をみない速さで高齢化社会が到来することは間違いないことです。この時期に大都市東京圏の代表的河川、多摩川およびその流域の位置づけを考える土地利用、都市計画の研究は重要なことです。人と川のふれあい、川文化の研究（例えば河川文化比較研究等）とともに、視野の広い観点に立った研究が殊に待望されます。

(2) 排水・廃棄物などによる多摩川の汚染の防除に関する調査・試験研究

水質調査は精緻なもの、地区ごとのもの、環境教育に役立つもの等応募者は増えてきました。しかし、不明、不説明の問題はつきません。行政機関で行っている調査とは別の目的が明確な調査を望みます。排水・廃棄物の

年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額(円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	6	—	6	9,500,000
	B類	—	—	—	—
	計	6	—	6	9,500,000
昭和51年度	A類	5	6	11	19,994,120
	B類	—	—	—	—
	計	5	6	11	19,994,120
昭和52年度	A類	17	4	21	28,285,010
	B類	6	—	6	1,984,900
	計	23	4	27	30,269,910
昭和53年度	A類	8	14	22	28,401,840
	B類	6	5	11	2,892,500
	計	14	19	33	31,294,340
昭和54年度	A類	11	13	24	36,875,240
	B類	7	5	12	3,381,490
	計	18	18	36	40,256,730
昭和55年度	A類	12	13	25	39,277,250
	B類	7	6	13	2,672,800
	計	19	19	38	41,950,050
昭和56年度	A類	9	13	22	40,973,500
	B類	4	5	9	2,187,400
	計	13	18	31	43,160,900
昭和57年度	A類	17	10	27	38,263,235
	B類	8	4	12	4,369,870
	計	25	14	39	42,633,105
昭和58年度	A類	10	18	28	44,547,920
	B類	8	5	13	7,835,654
	計	18	23	41	52,383,574
昭和59年度 (11月1日現在)	A類	8	16	24	41,041,880
	B類	3	6	9	5,960,098
	計	11	22	33	47,001,978
合 度	A類	103	107	210	327,159,995
	B類	49	36	85	31,284,712
	計	152	143	295	358,444,707

リサイクリングのケース・スタディなどもこれに属します。

(3) 多摩川およびその流域における水の利用に関する調査・試験研究

行政レベルで取扱っている大規模研究以外の小規模な水利用の研究。例えば、地域、地区、複数世帯のグループで都市の水循環を考え、実験してみる事等がこの研究です。

(4) 多摩川をめぐる自然環境の保全・回復若しくは環境創造に関する調査・試験研究

生物生態関係の調査研究は息の長い研究です。生物生態は、環境の歴史そのものです。水の管理と同様、自然環境の管理を考える研

究も大切なことです。

以上研究対象を4項目に分けて記しましたが、多摩川という大都市東京圏の代表的都市河川から都市の河川環境、ときには都市環境を研究する方々の多くの参画をお待ちしています。

公募締切日 昭和60年1月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号
(地下鉄ビル内)

電話(03)400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

<新刊紹介>

「生きている水路」

——その構造と魅力——

都市のなかを流れる川には、降雨流水を集めて流す川と、源頭部で入水量を人工的に制御して流通する水路(〇〇川とも呼ばれる)に大別できる。

この書は、国内にいまなお活用されている水路を全国的な視野からさぐり出し、筆者が10数年の歳月をかけて現地調査をおこなったなかで得た写真、イラスト等を豊富に使いそれらの水路の魅力と構造を視覚的に表現する工夫をめぐらしている。

とりあげられた水路は、①分派水路を多くもっている水路として東京の玉川上水路とその分水路を解説し、②、水利用形態を多様にもっているまちとして郡上八幡、馬籠、③、歴史的環境と深く関わっている水路として、京都の高瀬川、金沢の

渡部 一二 著 (多摩美術大学助教授)

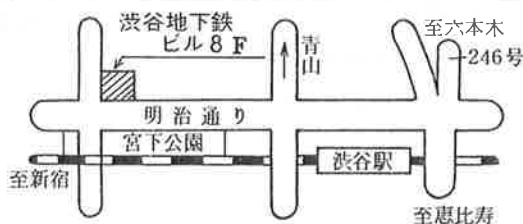
東海大学出版会 (¥2,500)

辰巳用水、倉敷、高山、萩、柳川をあげ、④、生活、生産業に深く関わっている水路として前橋、白井、富山、大内、津和野を、⑤、修景計画で個性化が表出している水路として岡山、飛弾古川、松山のあわせて18の水路をとりあげている。

筆者は、建築デザインを専門とすることから水路を利用する住民の知恵、利用のかたち、水路を軸とした空間構成などに着目しているのが注目にあたいしよう。

都市の川や水路の蘇生を考えておられる、自治体関係者、研究者、設計者そして水を中心とする環境蘇生活動を展開しておられる方々にも実例としての情報源になりうると思われる。

- ・発行日 昭和59年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125